

カタルーニャ州音楽教育の身体表現活動に関する考察

— 初等教育カリキュラム及び幼・小・中教員の教育観を視点に—

フェラン・ガリシア、ジュゼプ

A Study of Corporal Expression Activities in Catalan Music Education:
In the Primary School Curriculum, and from the Perspective of Preschool
and Compulsory Education Teachers

Josep FERRAN GALICIA

保育科,
安田女子短期大学

要 旨

身体表現活動を取り入れた音楽教育の実践は以前より国内外で注目され、音楽活動になぜ身体表現を取り入れるべきなのか、そして、どのような意義があるのかについての議論がなされてきた。筆者は、スペイン・カタルーニャ州のフィールドワークで幼小一貫校を視察し、身体表現と音楽の学習を結びつけた実践に出会い、机やいすを取り除いた広々とした空間で伸び伸びと身体を動かす教師や子どもの姿に魅了された。そこで、カタルーニャ州の音楽教育における身体表現にはどのような目的があるのか追究することで、国内の音楽教育に新しい視点をもたらす足掛かりにならないかと考え、本研究を遂行するに至った。本研究では、カタルーニャ州の初等教育カリキュラムの調査と教員を対象としたアンケートから、カタルーニャ州の音楽と身体表現を関連付けた教育にはどのようなねらいがあるのか探究することを目的とした。

キーワード：身体表現、音楽教育、幼・小・中教員、教育観、カタルーニャ州

1. 研究の背景と目的

カタルーニャ州における視察

筆者は、スペイン・カタルーニャ州の幼小一貫校において、現地の音楽教育の観察を目的にフィールドワークを実施してきた。現地調査を開始した当初から、机やいすなどの障害物を取り除いた広々とした学習環境や、拍やリズム、旋律の動きを身体で表現したり、視覚教材（例：スカートや巨大なカラフル輪ゴム、円柱の形をしたスティック）を音楽に合わせて動かしたりする音楽活動に魅力を感じた。このような音楽活動を提案する教師やそれに取り組む子どもたちは、音楽に合わせて能動的に身体を動かし、その行為を純粋に楽しんでいた。当時、身体表現活動が、音楽を学ぶ上でごく自然な営みであることを無意識のうちに捉えていたが、筆者にとっては印象

的な実践であったため、なぜ身体表現に力を入れた音楽活動が行われているのか、何を目的としているなどの疑問を抱いた。そして、その答えを探究する初期の研究活動として、教員へのインタビューや、カリキュラムの査閲などを行い情報収集した。その結果、スペインで17ある自治州のうち、芸術教育領域において「音楽とダンス」を1つの科目として位置づけているのはカタルーニャ州だけであることが明らかとなった。スペインは1975年の民主化以降地方分権化が進み、国全体の教育を統括する教育法で、教育課程の基準は設けられているものの、各自治州は独自の教育カリキュラムを設ける裁量があり、そのため、音楽教育も地域によって特色がある。

若干名の教員を対象としたインフォーマルインタビューでは、身体表現と音楽は一体化したものであり、区別して考えるものでないという返答があった。そこで、近年のカタルーニャ州の学校教育ではなぜ音楽と身体表現を一体化させた教育が行われているのか、調べる必要性があると考えた。

音楽教育と身体表現に関する議論

音楽に合わせて身体を動かすことが自然なことであり、音楽的能力を育てるために欠かせないという考えは、以前より提唱されてきた。その代表的な例として、リトミックの創始者である、エミール・ジャック＝ダルクローズ (1865-1950) の理論がある。ダルクローズは、音楽のリズムとダンスの密接な関係性について唱え、現代の音楽教育観に大きな影響を与えた人物である。彼は、著書『リズム・音楽・教育』で、「もっとも遡った古代にはすでに音楽に合わせたダンスがあって、その目的はリズムにあわせて身振り、動き、アマチュードを調整することであった」と述べ¹⁾、音楽に合わせて体を動かすことが古来のものであることを示している。また、身体表現の聴取感覚機能に関して、「聴取感覚は筋肉感覚、つまり振動音の包囲誘導 (influence enveloppante) が生み出す生理的現象によって補完されるに違いない」と言述しており²⁾、生理学的な視点からも音楽と身体の動きを分析し、音楽の聴取と筋肉の反応を関連付けている。ダルクローズは、このような考えをもとに、身体表現が内的聴取力を誘発し発達させるであろうと推測し、学生との実験を重ねるなかで、聴くことと身体的反応、歌うことと身体的反応、読譜・記譜と身体的反応を結びつけたテクニックを発展させた³⁾。このように、ダルクローズは、音楽教育とダンスの関係性について重要な教育理論を提唱し、現代の音楽教育感に大きな影響を与えた。他にも、同じく現代の音楽教育思想に大きな影響を与えた音楽教育学者でドイツの作曲家であるカール・オルフ (1895-1982) や、聴力の育成に力を入れたエドガー・ヴィレムス (1890-1978)⁴⁾ もその音楽教育メソッドにおいて身体表現の重要性を提唱している⁴⁾。日本においても、ダルクローズやオルフの教育哲学に影響を受けながら、これまでに様々な研究者が音楽教育における身体表現活動の指導法や意義について検討している。桑原 (2004) は、身体表現には、音楽の構成要素を知覚・感受する形式的側面と、音楽の構成要素の関連が生み出す曲想、イメージ等、音楽の内容的側面の、2つの要素があり、指導者がどちらの側面に焦点をあてるかで学習内容が位置づけられると述べている⁵⁾。桑原が音楽的要素の側面から身体表現の活動内容を提案している一方で、桐原 (2017; 2019) は、身体表現活動が他人との協働を活性化させ、「社会性」などの

¹⁾ エドガー・ヴィレムスはヨーロッパのフランス語圏と南ヨーロッパ、南米において活躍した20世紀を代表する音楽教育学者である。日本ではあまり知られていないが、特に、人間の聴取力の育成に力を入れた音楽教育メソッドの創始者として有名である。

コンピテンシー育成に関わっていることを研究成果として述べている⁶⁾。国府と戸田（2020）は、小学校低学年の鑑賞活動で身体表現を取り入れた授業実践に関する研究を行っているが、桐原の「社会性」とも共通点のある仲間づくりを意識して「仲間とともに聴く」ことや、子どもが飽きずに「もっと曲の続きを聴きたい」と思えるようにすること、つまり動機付けを授業実践のねらいとしながらも、結論では、身体表現を手段²⁾としてではなく、音楽と身体が一体となることに意義を見出している⁷⁾。以上のように身体表現を取り入れる目的や意義は、一義的なものではなく、様々な議論が行われてきたが、カタルーニャ州における音楽教育においてなぜ身体表現を取り入れるのか、その目的を明らかにすることで、この議論をより豊かにし新たな視座をもたらすことができるのではないかと考える。

目的

本研究の目的は カタルーニャ州の初等芸術教育の学習領域「音楽とダンス」に焦点をあて、学校の音楽教育に身体表現活動を取り入れるねらいについて、現地のカリキュラム及び教師の教育観をもとに明らかにすることである。

II. 研究の方法

芸術教育カリキュラムの分析

まず、カタルーニャ州の初等芸術教育における教科「音楽とダンス」を、身体表現活動に着目して分析を行った。分析対象は、2009年改訂の旧芸術教育カリキュラムと2017年改訂の新芸術教育カリキュラムとした。旧カリキュラムを分析対象に含めた趣旨は2つある。1つ目は、教員アンケートを実施したのが2017年であり、新カリキュラムへの移行期間と重複することを踏まえ、教育現場の実状に即した調査を行うことである。2つ目は、近年の動向をより深く理解するためにカリキュラムの変遷を辿ることである。

教員の質問紙調査

◎調査期間

2017年7月

◎対象

カタルーニャ州音楽教師協会（AEMCAT）の会員に回答を依頼し、幼児教育、初等教育、中等教育の音楽教員123名（女性99名、男性24名）から回答を得た。なお、初等教育カリキュラムを分析する他方で、幼児教育と中等教育の教員も対象に含めた理由は、回答内容に各教育段階を区別する相違点は特定できず、学校段階に関わらず音楽と身体表現の関わりについてより多くの知見を収集するためである。

◎調査項目

本質問紙調査では、1. 基本情報、2. 養成、3. 実践、4. 音楽教育における身体表現の目的の、4つの大項目を質問紙調査に設けた。本研究では、4. について、質問「音楽教育における身体表現の目的は何だと思えますか。」を自由記述回答で収集したものを分析対象とした。

²⁾ 国府と戸田の表現を筆者が下線を加えて強調している。

Ⅲ. 新旧芸術教育カリキュラムの分析結果

本研究では、カタルーニャ州の旧初等教育カリキュラム⁸⁾と新初等教育カリキュラム⁹⁾の芸術教育の学習内容をそれぞれ分析した。旧初等教育カリキュラムにおける全体の教科の構成は、カタルーニャ語、スペイン語、アラン語³（一部地域）、外国語、自然・社会・文化、芸術、体育、市民と人権、数学、宗教（選択制）であり、新教育カリキュラムにおいては、それぞれを言語分野（カタルーニャ語、スペイン語、アラン語、外国語）や数学分野（数学）などの大枠に区分しているものの教科の構成に変更点はない。芸術教育は「図画工作」と「音楽とダンス」の2領域に更に区分され、カリキュラムは芸術教育を1つの教科として位置付けているが、現場においてはそれぞれ別の教科として時間割を組むことが一般的である。本研究では、芸術教育の領域「音楽とダンス」に焦点を充てた。

分析を行った結果、はじめに、新旧いずれのカリキュラムも、芸術教育と体育教育の繋がりについて、ダンスの視点から言及している。

芸術教育は、特にダンスを通じて、身体的表現と身体的コミュニケーションにおける美的感覚と創造性の育成に取り組むため、体育との明白なつながりを維持しています。ダンスは、児童が自分の身体の可能性を知ることや、自分と他者を尊重すること、感覚を通して伝達され音楽によって豊かになった身体経験を共有するのに役立ちます。（カタルーニャ州初等教育カリキュラム 2007 芸術教育「序文」、2015 領域 芸術「序文」より引用）

カタルーニャ州の幼児教育・初等教育における身体表現の取扱いを研究しているSánchez (2010) らは、このカリキュラムの序文について考察し、各教科の中心的課題は、学校教育全体に共通する基礎コンピテンシーの習得であり、その意味で芸術や体育などの領域を超えた横断的な学習に意義があると述べている¹⁰⁾。

続いて、具体的な学習内容に関しては、いずれのカリキュラムも芸術教育は「図画工作」と「音楽とダンス」の2領域に区分されており、それぞれ「探究と感受」と「表現と創作」の2領域で構成されている。各領域はさらに第1期（7～8歳）、第2期（9～10歳）、第3期（11歳～12歳）の3つの発達段階に分けて設けられている。

次頁の表1は新旧カリキュラムの「探究と感受」領域を比較したものである。領域「探究と感受」において新旧カリキュラムを比較したとき、移行にともない内容が減少していることが分かる。旧カリキュラムでは特に「音楽」と「ダンス」それぞれに興味・関心を示したり、その可能性を模索したりするなど、音楽と身体表現を直接的に関連付ける内容以外が具体的に示されているのに対し、新カリキュラムでは削減されている。一方で、音楽と身体の動きを結びつける記述は双方に確認できる。旧カリキュラムでは、第1期の「音楽と身体的表現を連携させる。」、第3期「身体的活動をとおして音楽的、美術的要素を認識する。」、新カリキュラムでは、第1期「身体の動きと空間と音を適切に結びつける。」、第2期「音楽的もしくは視覚的な要素を身体で

³ スペインのカタルーニャ州アラン谷で用いられる言語で、カタルーニャ語と同じくカタルーニャ州の公用語である。

表現する。」とあり、①身体の動きと音楽を連動させること、及び、②身体表現を通して音楽的要素を感受するという2つの要素があることは共通している点である。

表1 「探究と感受」領域 身体表現に関する記述

芸術教育分野		
教科	『音楽とダンス』	
学習	探求と感受	
新旧	旧教育カリキュラム	新教育カリキュラム
第1期	<ul style="list-style-type: none"> • 身体の動きの可能性を感覚的に探求する。音楽と身体的表現を連動させる。 • カタルーニャ州もしくはクラスメートの出身地の伝統音楽と舞踏を知ること、興味を示す。 • 伝統的祭事や音楽鑑賞、ダンスやショーなどの芸術活動に参加することに興味・関心を抱く。 • 歌曲やダンスのメッセージを理解し、個人の実体験や想像的体験と関連付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> • 身体の動きと空間と音を適切に結びつける。 • 音楽もしくは身体表現の要素を視覚的に理解する。
第2期	<ul style="list-style-type: none"> • 芸術家が音楽表現と身体的表現に用いる音の素材、楽曲、身体的表現の多様性を鑑賞活動と観察を媒介に認識する。 • 芸術家が音楽やダンスをとおしてどのように表現するかを模索し、話し合うなかで探求する。 • カタルーニャ州の伝統的あるいはポピュラーな音楽とダンスを知る。クラスメートの様々な音楽体験や舞踊体験を知ること、興味・関心を抱く。 • メディアにおいて、音楽とダンスが取り扱われているということを認識する。 	<ul style="list-style-type: none"> • 芸術家が音楽表現や身体表現に用いる音や身体の動き、テクノロジーを知る。 • 音楽のもしくは視覚的な要素を身体で表現する。
第3期	<ul style="list-style-type: none"> • 人と円滑なコミュニケーションをとるためにふさわしい、身体的表現を探究する。身体表現の分析、相互作用を探究するために視聴覚資料を活用する。 • 音楽鑑賞会やコンサート、音楽様式や身体表現の振り付けなどに関する情報収集を行うために、マスメディアやインターネットなどを用いる。 • 音楽や身体表現をとおして表出する、様々な生き方、思想や概念を理解し伝達する。 • 身体的活動をとおして音楽的、美術的要素を認識する。 	<ul style="list-style-type: none"> • 身体表現によるコミュニケーションの可能性を探る。

続いて、表2は新旧カリキュラムの「表現と創作」領域を比較したものである。比較対照の結果3つの特徴が浮かび上がった。1つ目は、表現や即興、創作に必要な知識・技能の習得と表現力の育成について類似した内容が記述されていることである。旧カリキュラムがカタルーニャ州の伝統の継承に力を入れているのに対して、新カリキュラムにおいてはICTを活用した活動が重視されているなど、多少の変更はあるが、大枠を同じである。続いて、2つ目は、2つ以上の表現形式を連動させて表現することに関する記述である。具体的には音楽とダンスの連携や、伴奏と身体の動きの連携などの記述がそうである。最後に、3つ目は音楽の諸要素を身体で表現する学習内容についての新カリキュラムの記述である。例えば、第1期の「声と身体、もしくは楽器によるメロディーやリズムの模倣と表現、即興と創作をする。」があるが、これらの内容は旧カリキュラムの第1期の学習内容に含まれていない。旧カリキュラムにおいては、低学年の鑑賞活動の一環として音楽の感受を目的とした身体表現が挙げられているのに対し、新カリキュラムで

は表現や即興、創作の範囲においても一部ではあるが、音楽と身体表現に密接なつながりを確認することができる。

表2 「表現と創作」領域 身体表現に関する記述

芸術教育分野		
教科	『音楽とダンス』	
領域	表現と創作	
新旧	旧教育カリキュラム	新教育カリキュラム
第1期	<ul style="list-style-type: none"> カタルーニャ州もしくは諸文化の歌曲（伴奏つきとそうでないもの）と舞踊の表現及び、歌唱、演奏、身体表現技術を発展させる。 歌曲や楽曲に合わせて、ダンス、身体表現、遊びをする。 個人もしくは、グループでの作曲と振り付けの創作を行う。 音楽とダンスの特徴を、具体的に表現するための専門用語を習得し、活用する。 	<ul style="list-style-type: none"> 身体、音、音楽、ICTによるコミュニケーションの可能性を探る。 楽曲とダンスを創作する。 集団による歌唱とダンスを行う。伴奏との連携と指揮者の注目を大切にしている。 身体表現と声楽の基本的な技術を身につける。 声と身体、もしくは楽器によるメロディーやリズムの模倣と表現、即興と創作をする。
第2期	<ul style="list-style-type: none"> 芸術家が音楽表現と身体的表現に用いる音の素材、楽曲、身体的表現の多様性を鑑賞活動と観察を媒介に認識する。 芸術家が音楽やダンスをとおしてどのように表現するかを模索し、話し合うなかで探求する。 カタルーニャ州の伝統的かつポピュラー音楽とダンスを知る。クラスメートの様々な音楽体験や舞踊体験を知ることに興味・関心を抱く。 メディアにおいて、音楽とダンスが取り扱われているということを認識する。 	<ul style="list-style-type: none"> 身体、音、音楽、ICTによるコミュニケーションの可能性を探る。 楽曲とダンスの表現、即興、創作を行う。 集団による歌唱とダンスをする。伴奏との連携と指揮者の注目を大切にしている。 身体、音、音楽、ICTによるコミュニケーションの可能性を探る。 楽曲とダンスの表現、即興、創作を行う。 集団による歌唱とダンスをする。伴奏との連携と指揮者の注目を大切にしている。
第3期	<ul style="list-style-type: none"> 音や身体表現の様々な表現方法の可能性を探究したうえで、それらを媒介にアイデアや感情、経験の伝達を実践する。 正しい音程、発音、発声技術、演奏技術、身体的表現技能を習得する。音楽形式を用いて振り付けの即興、創作を行う。 音楽と身体的表現を連携させることを体験する。 身の回りの歌曲や楽曲、舞踏の探索、活用と評価。音楽とダンスに関わる地域の芸術祭やコンサートに参加する。 感覚、想像、体験、現実、アイデアなどをもとにした創作活動を音楽やダンスの様々な表現手段を媒介に行う。 音楽用語や舞踏用語を活用する。 	<ul style="list-style-type: none"> 身体、音、音楽、ICTによるコミュニケーションの可能性を探る。 楽曲とダンスの表現、即興、創作を行う。 集団による歌唱とダンス、伴奏との連携と指揮者の注目を大切にしている。 音程と声楽の技術、身体表現の技術を身につける。 音楽形式を用いて振り付けの即興、創作を行う。 音楽と動きを連携させる。 ICTを活用して身体や音のメッセージを創作する。 ダンスの活動に用いる特有の用語を習得する。

IV. 質問紙調査の結果

回答者の80.6% (100人) が初等教育の教員であり、その他の回答者は幼児教育7人、中等教育16人、その他1人である。現場における経験年数が11年以上の教員が全体の70%を占め、熟達した教員の回答者が多かった。教員養成を受けた高等教育機関に関しては、大学の初等教育教員養成課程が約80%、音楽院が約20%を占めている。表3は123人のアンケート回答者のうち自由記述の欄を回答した99の自由記述欄回答をコーディングし、カテゴリ化したものである。コーディングを行う過程で、【音楽の形式的側面】、【音楽の内容的側面】、【身体・運動能力】、【社会性】、【横断的コンピテンシー】、【経験・体験】、【表現】、【ダンス (身体表現)】 のカテゴリが浮かび上がった。各カテゴリには、自由記述の類似・比較・対照をもとに抽出した下位カテゴリがあり、表ではこれらをカテゴリの下方に示している。

表3 自由記述回答のカテゴリ化 音楽教育における身体表現の目的

【音楽の形式的側面】	【横断的コンピテンシー】
音楽の構成要素を感受する	注意力、記憶力を育てる
音楽要素をより無意識に、自然に伝達する	創造性を高める
音楽と体の動きを運動させる	自己の認識につながる
音楽の諸要素を内在化する	自己肯定感を高める
音楽要素をより無意識に、自然に伝達する	豊かな情操を養う
【音楽の内容的側面】	【経験・体験】
音楽から感じ取ったものを表面化させる	知性をとおして理解するまえに体で感受する
	遊びをとおして学ぶ
【身体・運動能力】	【表現】
運動能力を高める	感情表現できる時間とスペースを提供する
自分の身体を意識し、認識する	表現手段の1つである
身体・運動能力に秀でている子にとって有益である	
空間の制限・無制限を認識する	
エネルギーの解放、リラクゼーション	
【社会性】	【ダンス (身体表現)】
グループの結束を強める	身体表現を行うこと自体が目的である
子ども同士の関わりを心地よいものにする	カタルーニャ州もしくは諸文化の伝統舞踊を伝承する
他人の身体表現を楽しむ	

まず、カテゴリ【音楽の形式的側面】と【音楽の内容的側面】に関しては、「音楽の構成要素の感受」、「音楽の諸要素の内在化」などの音楽の形式的側面の知覚・感受を目的として挙げる教員が最も多かった。一方で、「音楽のリズムを内在化し、音楽を聴いて湧き起こる感情を表面化させる」という回答例もあり、音楽の曲想などから喚起するイメージを表現する内容的側面について述べ、形式的側面と内容的側面を関連付けている教員がいることが分かった。続いて、【経験・体験】でのカテゴリでは、「理解することが難しい理論的な概念を習得するための非常

に基本的な方法であり、それらの概念は運動を通して容易に理解される⁴。」という回答例にあるように、身体の運動を通して、つまり五感を刺激することで、抽象的な概念を理解する経験主義に基づく意見が多く寄せられた。次に、カテゴリー身体・運動能力に関しては、音楽教育よりも体育教育の学習目標に共通するものがあつた。例えば、身体能力に秀でている子にとって音楽の授業で身体表現を取り入れることが有効であるという考えが示された。カテゴリー【横断的コンピテンシー】は、汎用的な能力の育成に通じる内容から生成した。そのなかには、記憶や集中力など認知機能、実行機能に跨るものから、自己肯定感や自己認識など心理的側面につながるもの、創造性や情操の発達などがあつた。【社会性】に関する意見も多く寄せられ、グループの結束や他人の身体表現を楽しむことなど、社会的な側面に良い影響を与えることも1つの目的として挙げられた。カテゴリー【表現】は、文字通りであり、身体表現が表現形式の1つであり、感情や意思などを表現することが目的と捉える教員がいた。最後に【ダンス（身体表現）】に関しては、音楽的能力や身体的能力を向上させる手段としてではなく、ダンスや身体表現そのものを行うことが目的であるという見解も示された。

V. 考 察

本研究では 筆者のカタルーニャ州現地における授業観察の経験および、音楽と身体表現に関するこれまでの国内外の議論を背景に、カタルーニャ州の学校音楽教育において身体表現活動を取り入れるねらいを明らかにすることを目的とした。具体的には、新旧初等教育カリキュラムと教員のアンケート調査をとおして、なぜ、音楽教育に身体表現を取り入れるのか、なにを目的としているのかを見てきた。

カリキュラムの分析では、ダンスが芸術と体育を結びつける架け橋であることが述べられており、体育教育との関連性が重要視されていることが明らかとなった。体育教育からのアプローチを積極的に取り入れたいという意向が序文から推察できる。学習内容の分析からは、①音楽とダンスそれぞれの知識・技能の習得に関するもの、②音楽とダンスを連携させるもの、③音楽的要素を感受する手段としての身体表現の活用が、新旧カリキュラムに共通するものとして挙げた。一方で④音楽の形式や特徴などを表現することを目的とする内容が新カリキュラムに組み込まれていた。つまり、音楽の形式的側面であるリズムパターンや旋律、音の重なりなどの特徴を身体の動きを用いて感受するだけでなく、その音楽特有の特質や美しさを身体の動きをとおして表現する内容が加えられているといえる。その内容が著しく増加しているともいえないが、音楽の形式的側面→内容的側面への移行を想定した学習目標が読み取れる。

続いて、教員アンケートでは、音楽教育において身体表現活動を取り入れる目的について、自由記述回答形式で調査した。コーディングを行った結果、【音楽の形式的側面】、【音楽の内容的側面】、【社会性】、【横断的コンピテンシー】、【経験・体験】、【表現】、【ダンス（身体表現）】のカテゴリーに区分することができた。筆者は、上記のカテゴリーは、ほとんどがカリキュラムの学習内容と共通する内容であると考えた。【音楽の形式的側面】と【音楽の内容的側面】については、音楽の諸要素を感受することや、感受した特質や美しさを表現することを目的とする点において両者は共通しているといえる。また【身体・運動能力】に関しては、カリキュラムの序文

⁴ 筆者が回答例に下線を加筆した。

にある体育教育との連携に関する序文において、【ダンス（身体表現）】に関しては、ダンスそのものの表現力や知識・技能を習得することが目的である点についても教員の教育観とカリキュラムは一致していた。一方で、【社会性】や【横断的コンピテンシー】に関しては、芸術教育カリキュラムの領域「音楽とダンス」に関わらず、芸術教育や初等教育全体の目標と共通する内容である。これによって述べたいことは、つまり、カリキュラムにおいても教員の教育観においても身体表現活動とキーコンピテンシーの習得には強い連関が共通認識として存在していることである。これらのカテゴリーがカリキュラムの内容と共通点を有していたのに対し、【経験・体験】のカテゴリーは教員の回答結果から現れた教育観において固有にみられる学習目標であった。【経験・体験】という内容はどちらかといえば音楽教育の方法論に関する教員の考え方を象徴しており、学習者の経験こそが教育の本質でありという、経験主義の視点から身体表現の可能性を捉えている教育観が浮かび上がった。

カタルーニャ州の音楽教育の特徴の1つが音楽と身体表現を密接に関連付けているということは言うまでもない。身体表現はまず、音楽的側面の感受や表現の手段として、また、ダンスや身体表現そのものの表現力及び技能の習得、更に、社会性や自己認識など様々な分野に跨る汎用的な能力の習得を目的に用いられているといえる。一方、外界の情報をより内在化させ、抽象的な概念の理解を容易にする経験主義的な立場が、現在のカタルーニャ州の音楽教師の教育観において重要な位置を占めているのでないかこの研究結果から読み取ることができると考える。

VI. 今後の研究課題

本研究で明らかになった教師の音楽と身体表現に関する教育観が子どもの学習にどのように反映され、影響を与えているのかを研究することは今後の重要な課題である。また、体育教育における身体表現との繋がりについても、今後カリキュラムの分析や、音楽とダンス、体育を関連付けた現場の実践を視察し、理解を深めていきたい。

引用文献

1. エミール・ジャック＝ダルクローズ/河口道朗編、河口眞朱美訳 (2009). 『リズム 音楽・教育』開成出版.
2. 前掲書
3. チョクシー, L., エイブラムソン, R., ガレスピー, A., ウッズ, D. /板野和彦訳 (1994) 『音楽教育メソードの比較 コダーイ、ダルクローズ、オルフ、C・M』全音楽譜出版社.
4. 前掲書; Willems Edgar (2011) *Tras los pasos de Edgar Willems anexo del libro original*, Trans. Jacques Chapuis & Béatrice Westphal, Pro-Musica.
5. 桑原章寧 (2004) 「小学校音楽科の身体表現活動におけるカリキュラムの構想」『学校音楽教育研究』、8 (0)、pp.164-172
6. 桐原礼 (2019) 「身体の動きを伴った音楽表現づくりにおける学びについて」. 信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センター紀要『教育実践研究』No.18, pp.119-128; 桐原礼 (2018) 「多文化状況下における児童間の関係性構築に向けた音楽教員の対応に関する考察—スペイン・ムルシア州におけるインタビュー調査を通して—」、『音楽教育学』47 (0)、pp.25-36
7. 国府華子, 戸田彩華 (2020) 「音楽授業における身体の再考—身体活動を取り入れた小学校低学年の鑑賞の実践を通して—」『愛知教育大学研究報告. 芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編』(69), pp.11-16
8. カタルーニャ州教育省 (2009). *Curriculum d'Educació Primària*. Servei d'Ordenació Curricular d'Educació Infantil i Primària.

9. カタルーニャ州教育省 (2017). *Curriculum d'Educació Primària*. Servei d'Ordenació Curricular d'Educació Infantil i Primària.
10. Sánchez Ariño Sílvia et al (2010). Didàctica del moviment en educació musical CiDd: II Congrés Internacional de DIDACTIQUES 2010, 372, pp.1'7

[2020. 9. 17 受理]

コントリビューター：藤原 逸樹 教授（保育科）